

東日本大震災からから6年

宮城県石巻市牧浜 漁師 豊島富美志さんと共に



3月11日午後2時46分、海面ごと揺さぶられた。バタバタという激しい上下動で、エンジンが焼き付いた時の揺れに似ていた。3分以上続いたと思う。当時、私は湾内に停泊した船上で今季のカキ漁の切り上げ作業をしていた。翌日は次のコウナゴ漁に備え船の上架を予定していた。

海と陸とで揺れの差はあっただろう。しかし、普通の地震ではないことだけは分った。浜の行政無線が「6メートルの大津波」を知らせていた。

船を岸に寄せると岸壁に妻が自宅から降りてきていた。「室内は神棚から社が落ち、高い所の物や食器類がすべて飛び散って足の踏み場もない」と話すのをうわの空で聞いていた。とりあえず自宅に待機を指示した。

海に目をやると早くも沖合を目指す船があった。浜の漁民にとって「地震があったら津波の警戒」は常識。次の行動は「沖出し」だ。自分も買ったばかりの車の高台移動を頼み、沖に向かったのは午後3時15分ごろだったと思う。まさか10メートルの高台に建つ我が家にまで津波が到達するとは考えもしなかった。

沖に10分くらい走った時、津波の第1波が船底を鋭く突っ切ったと感じた。すぐ振り返った。見たのは既にもみくちやにされたカキ棚だった。

速度を上げさらに4～5分走った。前方から高さ5メートルくらいの波が迫ってきた。上部は黒く、下は青っぽい。船首を波と15度の角度に構え波を待った直後、船は意外にもすんなり波を乗り越えてくれた。

今度は引き波だ。流速は15～16ノットぐらい。あっという間に船は大原沖

までもっていかれた。海上には養殖施設やコンテナ、港から流された船、丸太、材木片などありとあらゆるガレキが漂っていた。それらを慎重に避け、なんとか浜の沖まで船を戻した。

午後4時過ぎ、みぞれが降り出した。押し波と引き波がほぼ10分間隔で繰り返した。そのたびに船を立て直す。あたりには仙台製油所の火災と石巻門脇での火災の匂いが漂い、暗くなると空はオレンジ色に染まった。以前、どこかで見た仙台空襲の映像を思い出していた。

夜の操船は危険と判断し、比較的大きな漂流筏に係留したり離れたりしていた。ついに恐れていたことが起きた。流れロープがスクリューに絡み付いたのだ。万事休す。僚船にSOSを出すしかなかった。

間もなく助けの船にえい航してもらえたのは幸運だった。前照灯だけを頼りに闇の中、2隻が連なって湾沖を行ったり来たりした。もちろん大変だったのは僚船の船長だ。細心の注意で一晩中、ガレキの海を乗り切ってくれた。

夜明け。北西の風に乗って石巻方向から流れてくる丸太と発泡箱が目についた。白い発泡箱が朝日を受けて強風に回転しながら舞い飛ぶさまはさながらカモメの群舞だった。

津波は朝になっても終わっていなかった。翌日午前7時ごろ、沖から見た浜はカキ処理場の屋根だけがぽっかり浮かんで見えた。同午後2時過ぎ、大きく沈下し、破壊された港にようやく上陸することができた。「あなたは私より船の方が大事なのね」。再開した妻がつぶやいた。

「3. 11 あの日から」豊島富美志著 より抜粋

すべてはここから始まった。

(この後の記録については一部を抜粋したものです。)

3月12日

地震、津波ですべてのライフラインが絶たれ、陸の孤島となる。
指定避難所・東浜小学校まで裏山の道なき道をたどってたどり着く。
近所の人の中車で夜を明かす。

3月13日

朝6時に浜松航空隊の救難ヘリが着陸、病人やお年寄りを石巻まで移送してもらう。食料等の支援はその後少しずつ始まる。

五浜統合の「東浜地区災害対策本部」が立ち上げる。
本部長に推される。

ここまでの食料は、一人一日
ビスケット6枚。

男は使える漂着物探し。
山で焚き木取り。
沢水くみ。

女は何を食べさせるか
献立会議。

「道の確保」を試みるも
ガレキに阻まれ、孤島状態。



3月15日

自衛隊のヘリがバナナ、缶コーヒー、ペットボトルのお茶を届けてくれた。
外部から届いた初の食べ物だった。

3月16日

塩釜の子供たちの安否が確認できた。
トイレの問題が深刻となる。

3月17日

山形20連隊が必要物資を聞いていった。
長野赤十字スタッフが来て医療面の不安が少し消えた。

3月18日

一歳の乳児がぜんそく症状のため、救難隊ヘリによって石巻赤十字病院へ搬送してもらう。

この日届いた物資はコーンスープ、水、バナナだった。

3月20日

野菜不足で体調を崩す人が出てきた。

網地島の医師が来る。108人の避難者を確認。

市災害対策本部と日赤に伝える。

AAR（難民を助ける会）にも医療スタッフ派遣を要請。

ドコモが衛星電話を設置。

3月21日

流出した運転免許証に特例免許証が発行された。

県漁協からガソリン200リットルが支給される。

3月22日

救援物資を的確に届けるために、氏名、年齢、性別などの住民リストを作成する。

海上自衛隊や海上保安庁からも物資が届くようになるが、当地よりもひっ迫した状態の他地区に支援するようお願いした。

リストによる食料分配

	3/17	3/19	3/20	3/21	3/22	3/23
バナナ②	バナナ②	コーンスープ④	バナナ①	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ③	バナナ③	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ④	バナナ④	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ⑤	バナナ⑤	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ⑥	バナナ⑥	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ⑦	バナナ⑦	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ⑧	バナナ⑧	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ⑨	バナナ⑨	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ⑩	バナナ⑩	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ⑪	バナナ⑪	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ⑫	バナナ⑫	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ⑬	バナナ⑬	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ⑭	バナナ⑭	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ⑮	バナナ⑮	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ⑯	バナナ⑯	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ⑰	バナナ⑰	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ⑱	バナナ⑱	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ⑲	バナナ⑲	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ⑳	バナナ⑳	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ㉑	バナナ㉑	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ㉒	バナナ㉒	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ㉓	バナナ㉓	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ㉔	バナナ㉔	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ㉕	バナナ㉕	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ㉖	バナナ㉖	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ㉗	バナナ㉗	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ㉘	バナナ㉘	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ㉙	バナナ㉙	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ㉚	バナナ㉚	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ㉛	バナナ㉛	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ㉜	バナナ㉜	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ㉝	バナナ㉝	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ㉞	バナナ㉞	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ㉟	バナナ㉟	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ㊱	バナナ㊱	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ㊲	バナナ㊲	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ㊳	バナナ㊳	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ㊴	バナナ㊴	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ㊵	バナナ㊵	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ㊶	バナナ㊶	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ㊷	バナナ㊷	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ㊸	バナナ㊸	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ㊹	バナナ㊹	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ
バナナ㊺	バナナ㊺	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ	バナナ

70以上	7	5			40	49	11	3	5
成人男子	24	11	15	11	2	33	27	11	8
中・高生	5	0			4	5	5	3	0
小学生	2	3	3	8	5	7	2	2	2
幼児	1	1			9	4	2	0	1
3~6	(4)	1	1						
幼児									

浜に3遺体が漂着。石巻市内の仮安置所へ自衛隊が搬送した。

3月23日

物資搬入の担当が北海道帯広の陸自第5旅団へ交代、物資の初搬入は長靴、風邪薬、トイレットペーパー、青汁、野菜ジュース。

バキュームカーがやっと来た。

このころの必要物資はトイレットペーパー、紙おむつ、マッチ、乾電池、アルミホイル、ラップ。なぜか懐中電灯とローソクだけが届かない。

3月24日

避難所の照明は船のバッテリーと車の室内灯を外して代用。

船からのガソリン泥棒を消防団が警戒パトロール。

3月25日

このころから住民に勝手な行動が目立ってきた。合同会議で地区の「和」を強調した。

罹災、被災証明の発行を地区民一括で石巻市荻浜支所に申請した。これは本当に助かった。仮設住宅入居の一括申請は4月11日にした。

3月28日

この日から「外来者ノート」を置く。



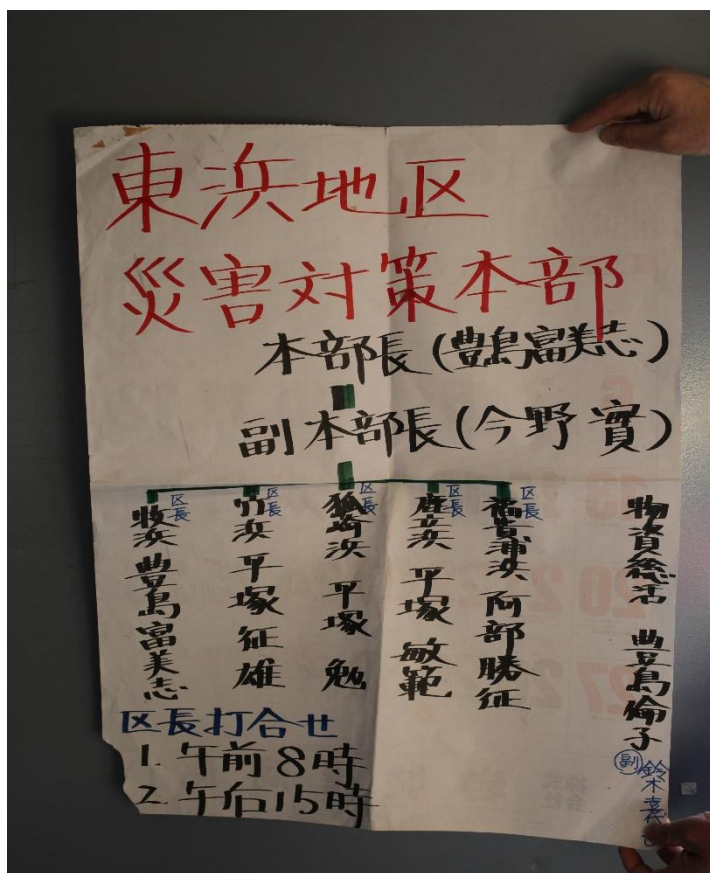
3月29日

東浜小の卒業式（6人）、終業式、離任式があった。来賓は自分のみ。久しぶりに顔を合わせた子供たちは、はしゃぎ合っていたが式は案の定、涙、涙に。

3月30日

浜に初めてのボランティアが来た。

三重県は忍者の里・伊賀市からの2人だった。発電機一台とテント1張を頂戴した。これで小学校玄関にあった本部が外に出て、テント本部となった。



2011年
4月1日～

東浜地区災害対策本部
組織図

4月2日

石油ストーブ15台が届く。
浜に20歳前後の女性遺体が漂着。

4月3日

自衛隊からシャワー開設の相談。2週間後に開設。

4月6日

自転車、灯油、軽油が来た。

4月7日

午後11時ごろ大きな余震（震度6強）があった。小学校へ駆けつけると牧浜、竹浜の全員が集まっていて不安そうにしていた。

がけ崩れ発生

4月11日

被災から1ヵ月。午後2時46分、海に向かい黙とうする。

座礁したガット船から2遺体を発見。

AAR（難民を助ける会）による住民バス・通称「難民安田号」（石巻赤十字病院行）が始動した。

4月13日

「仮設住宅の早期建設」と緊急雇用」について市に陳情することに。

栗原西中から柔道用の畳80枚が届く。避難所生活が快適さを増す。

せっかく届けられた物資が錯綜、無駄になる場面もあった。

住民に「支援慣れしている」様子も見え隠れした。

あらためて本部の役割、立場の明確化、住民間の意思疎通と協力体制など再整備の必要性を思わせられた。

4月21日

東浜小学校の入学式。女兒一人が入学。来賓出席は今回も本部長の自分のみ
小学校の授業も再開。

いまだ情報源はラジオのみ。

県海区調整委員会が「漁業、養殖作業を5月末まで自粛することになった」
ことを伝える。

4月24日

学校と一部の家々に電気が先行点灯した。

4月27日

AAR（難民を助ける会）による声帯模写の江戸屋猫八・小猫の慰問があつた。

仮設住宅用地に私有地2年間貸与の内諾も得た。

伊賀からの本部テントが強風に吹き飛んだ。

「仙台ゼロ工房」に頼むと2日間で新たな木造の本部小屋を小学校玄関に造ってくれた（もちろん学校敷地内のため学校長許可は得た）。

夕方、和歌山県の一行から豚汁の炊き出し、これが浜への初の炊き出しだった。



本部小屋で当時を語る豊島さん

4月30日

AAR（難民を助ける会）加藤副理事長が洗濯機と乾燥機を持参した。加藤氏は真新しい本部の小屋を見て「できたんですね」と喜んでくれたので、すかさずサインをお願いした。

これが本部小屋サインの第1号となった。

この後、豊島さんの記録は震災後348日目まで続く。AAR（難民を助ける会）加藤副理事長は「心優しき仁王様」と豊島さんのことを評した。

「俺たちは乞食じゃないから、必要以上の物資は受け取らない」

「もらって生活することに慣れてしまったら自立、独立はできない」
これが初対面のときに豊島さんが話されていた『被災した人間の心構え』で
した。たしかに他の避難所とは一味もふた味も違った趣だったのを今でも覚
えています。避難所の入り口にねじり鉢巻きでどんと構え、入ってくる人間
を一人ひとり吟味するがごとく眼光鋭く睨みつけるその姿は、まるでお寺の
山門に立つ仁王様のようなのです。でも、実は心温かく常に一步先を見据え、避
難所で生活する人々に少しでも過ごしやすくしてあげたいという、優しさに
溢れた人物だとすぐにわかりました。

特定非営利活動法人 難民を助ける会（AARJapan）

副理事長 加藤タキ「3・11あの日から」発刊に寄せてより抜粋



本部小屋は、救援に来てくれた自衛隊やNGOやNPO、ボランティアのサイン
で埋まっている。まる5年が過ぎ、油性マジックで書かれたサインも薄れてき
た。人の記憶も同時に薄れてゆくのだろうか。

大石田町では、有志や大石田町社会福祉協議会を中心とする災害ボラン
ティアが南相馬、岩沼、塩釜、東松島、石巻、南三陸、釜石等へと向かった。

時間の経過とともに、ボランティアの作業もなくなり、被災地を訪問するこ
ともめっきり少なくなってきた。そのような中で、町の職員を介して豊島さん
と出会い、仮設住宅で暮らすお年寄りを励ますことを目的として訪問させて

いただくことになった。山形名物のいも煮をしたり、花笠音頭を披露したり、一緒に踊ったりした。



伝統の獅子風流 仮設住宅で暮らす方々を励ます豊島さん



豊島さんの話を聞くボランティア「いこいの会」のメンバー

被災5年目となる昨年3月11日、大石田町社会福祉協議会が毎年開催する「福祉講座」に講師として来てくれた豊島さん、震災当時の様子や対策本部長としての活動を振り返り語ってくれました。海の男を感じさせる男気に溢れる講演でした。



豊島さんの応援団は全国にいる。中でも自衛隊の方々への感謝の思いが今でも当時の隊員との交流につながっている。また大学での講演やNPOからの講演依頼が今も多く、牧浜を訪れる人も後を絶たない。

結局、いつものスタイルになった豊島さん。やっぱり彼にはこのスタイルが一番合っている。着用しているチョッキは支援者からのサインで埋め尽くされている。まるでお遍路さんのようだ。



豊島さんをはじめとする牧浜の方々との交流はこれからも続くだろう。

災害ボランティアの原点は人それぞれでしょうが、2011年3月11日を原点とする方も多いかと思う。あの日から、この記事を書いている私自身の生き方も変わったように思う。豊島さんと共に歩むことは自分の立ち位置を確かめることでもある。

つづく

写真提供：豊島富美志さん、高橋金雄さん、いこいの会